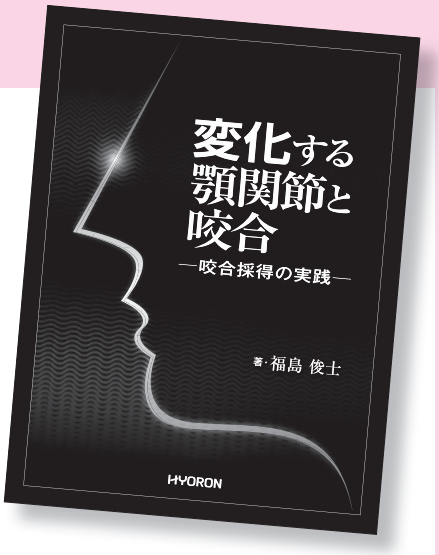

変化する顎関節と咬合
――咬合採得の実践――

福島俊士 著

A4 変判・272 頁・定価（本体 12,000 円＋税）
2014年 5 月21日　ヒョーロン・パブリッシャーズ刊

鈴木　尚
（東京都中央区／ナオ歯科クリニック）

咬合に深い関心を持つ一歯科医師として本書が出版されるのを心待ちにしていたので，発売とほぼ同時に入手した．手に取ってまず驚いたのは 260 頁という圧倒的な頁数である．咬合を扱った書籍としては想像できないほどの厚みであった．

それだけ著者の深い思い入れを感じたのだが，しかしその謎はしばらく読み進むうちに氷解した．どの頁にも多彩で豊富な写真や画像が満載されているのである．しかも，そのどれもが大きくて見やすい．そればかりかその画像は病態の説明や治療のプロセスを十分に理解させようとする意図が感じられ，丁寧な解説に欠かせない要件の一つになっていると思われた．口腔内の的確な画像や緻密なイラストがなければ，術者の思考と治療術式が想像した仮説どおりに進行しているかどうかを特に若い読者に伝えることは難事であろう．

ご存知のように，咬合治療を要する症例群は画一的な論理で扱えるほど単純な症例ばかりではない．かつて咬合治療に投げかけられた多くの疑問がそれを物語っている．本書はその疑問の中心を外すことなく「咬合と顎関節」をセットにして明瞭に解説しようと試みている．それが上手に伝わっていると思われるのは，静的な咬合から下顎を移動させることで始まる動的な咬合の捉え方や，同時に静止から移動へ変化する顎関節組織をエックス線画像によって比較観察していることであろう．このことで咬合の診断は確実に信頼性を獲得することになる．

本書は全編が 5 章に分かれているが，Ⅱ章までは咬合治療の是非や最も重要な点を簡潔に挙げて解説している．つまりⅠ章は下顎位の評価から下顎位の決定，Ⅱ章は下顎位を変更する際の咬合採得の術式，そしてⅢ章は外科的矯正治療と咬合で，いずれも咬合治療が必要な症例を示して，問題点の抽出とその考え方，そして治療術式とその行程を詳細に示している．特に著者が考案した「レジンキー」は本書中に多く例示されているが，簡便で，かつ咬合採得の精確さを獲得するためには訓練してぜひ読者諸氏の「技」とするべき方法だと思う．

素晴らしいのは例示されている症例が著者自らが手がけた症例ばかりで，その数は 27 例にも及ぶことである．そしてさらなる驚きは，提示症例のすべてに経過が付記されていることだ．数十年の経過は治療術式の安全性や危険性などとともに，咬合をどのように考えるべきかの重要な示唆を与えてくれる．

次に続くⅣ章とⅤ章は，前章までに示された提示症例の診断と治療を考える基準となる基礎的咬合論の解説である．基準位としての「下顎頭位」は常に疑問が投げかけられる部分であるが，理論と実際の接点となる著者の臨床的考察には大いに賛成したい．

また著者は終始一貫，習慣性開閉口運動を重視している．この運動をいかに規則性のある運動に成熟させるかが治療の鍵になるのであろうが，その術式は各症例の示す病態によって微妙に異なるようである．それを使い分ける術は症例ごとに本書の解説の中に隠されている．

私は福島教授ほど理論と臨床を融合させるべく研究を全うされた補綴家を知らない．提示された症例はいずれも最小限の治療範囲が遵守されており，ご自身も補綴とはそうあるべきだと断じておられる．そのために十分な観察期間を経て診断する姿勢そのものが，この本のタイトルである『変化する顎関節と咬合』の意味を語っているように思われる．

今だからこそ出版された貴重な書籍であり，この著書をきっかけとして 20 数年にもわたって元気がない「咬合学」に再び光が射すことを願ってやまない．